
摂食障害のわたしと向き合う

妙 ちひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

摂食障害のわたしと向き合う

【Nコード】

N4791Y

【作者名】

妙 ちひろ

【あらすじ】

向きあう、ってどうなんだろう。いつものことだし、例えばコミュニケーションをとることは自分自身と向き合うことなんです言うけど、ほんとうにそれしかないんだとおもう。あらたまる必要ないよね。

お腹がすいているのよ。

そう、彼女が言うのだけれど、彼女自身に満腹感や、広義な意味での満足感があること自体が驚異的だった。だからわたしは、はじめとどめようとした。どうせ満足しないでしょう？食べ物を含め、物質が食道を通過するときに気道は塞がる仕組みなのだから、窒息のようで苦しいだけだよ。

それでも、お腹がすいて眠れないのよ。

夕食は、食べていない。昼食はヨーグルトを飲んだ。けれども、朝食がいけなかった。2人以上の食事をしたうえで、大きな容器のアイスクリームまで漁って、すべて脆弱なからだに詰め、過食をしていたから遅刻しましたなんて言えないから、電車に乗り遅れたとだけ、伝えて。

温かいお茶でも飲んだら眠れるだろうが。けれど、彼女自身のからだはくたくたに疲れているし、わたしは眠ってしまいたかった。眠ってしまえば食べることもないのだから。

いまよりも10キロ以上痩せていたときに、倒れるように眠ったこと。死んでいたのかもしれないほどに、あつというまに眠って朝早くに目覚めた。食パン一枚を食べることができず、コンビニの塩おにぎりを、2時間以上かけて食したときには、からだの具合も精神の具合も快調であった。なにも望んでいないから、すべてにおいてパーフェクトであれたとおもう。すくなくとも感情は。苛立ちもなく、ただ、夜に、すさまじい量の食べ物を食している夢をみて、恐怖だけが目覚めにやってくる。怖くて怖くて、そうして目が覚めて、夢でよかったっておもって、だけどすぐには起きられない。貧血は、

過食に傾く現在であっても治らない。

要するに、栄養。

からだに入れるものであるのだから、からだに優しくしてください。ご自重なさって、と、ひとりで階段を降りながら、真夜中、くすくす笑って台所へ。

食べることは怖くなくなった。太ることも怖くなくなった。

それなのに、どうして、いやがっているのだろう。

太ることは怖くないのに、衝動が収まらないのが怖い。

神さま、太るのが怖いです。助けてください。leptus、レプチン様、どうか分泌されてください、食欲抑制ホルモン。それと、わたしにセロトニンを。あと受容体、なんだっけ、わかんねえや多すぎて。

とにかく温かなお茶を入れて差し上げましょう。ほらほら、インドネシアの紅茶があるよ、ティーバッグが手編みになっているから、お湯に浸すとその重みで伸びてとても楽しいね。

それなのに、彼女はミルクティーを選んでしまう。ああ、ばか。知らねえぞ。案の定過食に移る。パスタ（よりによってカルボナーラ）を、茹でている間に、明日一日の食事にしようとしていた食パン一斤（べたべたにジャムとバター付けた）食べつくす勢い。パスタ、ちよっと伸びた。まあいいや、そのほうが食ってる気になるって。

ああこの勢いで嚙ってる麺が喉に絡みついて、うまい具合に食道締め付けてくれねえかな、そうなるわけねえか、ばかばか、はいごちそうさま。

あ、板チョコ発見、食べちまおう。そうやって2枚消費する。

過食のときにはカロリーが高いものをあえて選んで行っている。紅茶を買わずに、甘いジュースだったり、ヨーグルトやゼリーじゃなくて、プリンだったりケーキだったり、する。ベーグルやフランスパンじゃなくて、食パンやパイやデニッシュ。ブリオッシュ。ヴィ

エノワ。最終的には米にかぶりつく。もうふりかけしかおかずにないのに。

疲れたときには甘いもの、なんて言うけど、わたしは甘いもので余計に疲れること、知ってる。でぶの疲労した顔、消化に疲れた顔、可哀想な肝臓、腎臓、心臓、その他大勢。

疲れたなあ。もう寝よ寝よ。

食べたばっかで横になる。だってそのほうが楽だから。

動悸がする。階段あがるのしんどい。歯磨いてない、まあいいや、寝る寝る。

翌朝のむくみが怖い。顔だけパンパンなんだもん。だめだ、考えたからだにものが入ったわたしは、醜い。

学校でお昼ご飯を食べることはできなかった。

弁当の匂いが嫌いなんだ。それ以上に、カロリーが分からないことを恐怖していた。一年前、昼食は、ビスコ2枚で十分だった。1パック5枚が、一日の食事であった。体重計に乗るのが楽しくて、はやく眠ってしまいたかった。だるいからだ。

いまでもお昼は食べられない。夜は、7時過ぎまで勉強。お腹がすいてしまうけれど、意識しない。後者を出た途端にでてる食欲、空腹、ふらつくからだ。コンビニやスーパーに寄れないように、駅までの時間ぎりぎりで校舎を出る。この電車がしたら悲惨だぜ、って。

だから朝の過食がやめられなかった。2000、或いは3000以上のカロリーを摂取しても足りない。

まだ入るよ、口さびしいのかも、寒いから、からだが冷えるのが怖いよ。

わたしがそうおもう。確かに、からだか冷えることを恐怖している。

貧血で倒れたくらいの体型に戻りたいとは思っている。それ以上に、衝動が怖い。糖尿病や腎臓病で、将来何もできなくなるのではない。か。ぼろぼろなのに、未だに言われる。

スタイルいいね。

スタイルがいいわけじゃない。美人じゃないのに、いまだ、きれいだっていう。お世辞は分からない。自分の顔が整っていることは自覚しているが、特徴はほとんどない。この大きな二重の目が、肥満でつぶれ、小さくなったら、すっきりした頬が脂肪でぶくぶくに浮腫んだら、細く、長い首が、華奢な肩が、脂肪でうもれたら、小さく上がった口角も、きれいな形した唇、頬の重みで下に引きずられたら、不満そうな顔。例えば痩せていたら小さく可憐な鼻であったって、デブの鼻じゃあ豚鼻みたいな形。色白なら、白豚。けれどもちど過食衝動が出ると、日焼け止めを塗ることすらどうでもよくなる。死にたくなる。わたしの肌は白いけれど、来年の夏どうしよう。それまでに、収まるかな。

周囲のひとの容姿で何かおもったことはない。デブでも、ブスでも、醜いひとなんていない。同じ数の目に口に、鼻に、耳。生きる物のしなやかさ、人間のからだのうつくしさ、すべて知っている。だけど自分は醜いものであって、或いはわたしは、すべての醜さや感情の起伏の激しいことへの原因、諸悪の根源を自分自身に向けることで発散していた。そんな人間はとも壊れやすく、繊細であるから、さらに周りの人間を悩ませる結果になっていたことに目もくれず。

どうして傷つくんだろう。こんなに、どうして、泣きだしてしまうのだろうか。

学校や電車の中や、家や。どこにいたって傷つき、惨めな気持ちを、おおきく自覚するのは、過食のときだけ。過食が怖い。ほんとうは、食べることも大っきらい。怖い怖い、だけど、食べなくては、なにも頭に入ってこない。憶えるべき英単語も単語も、いっぱいあって、

公式、問題のとき方。憶えて、きつと、いい大学に行つて、ひとりぐらしして、それで精一杯、過食する？

助けられるとか治療とか、そんなのない。

気にするから摂食障害で、苦しんでいるのであつて、過食する自分ごと受け入れてやればいい。自分を咎めるのは自分しかない、自分を愛してやれんのも自分しかないことだつて、知ってる。けれど、過食してデブになった自分を受け入れたつて、デブだつて周りのひとに揶揄されたら傷つくだろう。それが、怖い。恐ろしい。美醜が社会の基準なら、言い訳はできないのだから。

自分が結婚できるとかおもつてないし、そんなこと望んでない。

例えば現在のように、たくさんの方にいろんなことを教えてもらっているのが好きだし、大学にいったら優秀な教授にくつついて、様々なことを教えてもらつてたい。准教授でいたいとおもう。常に知りたいたいとおもう。だからどんなひとでも仲良くありたいとおもう。恋人は、無理だろうお互いに重すぎて。食事の世話も着替えもすべて行なってくれるような、召使みたいなひとがいるとは思えないし、自分がそこまで落ちぶれたくない。わたしは、そんなに安くないんだ。自分が憧れるひとの補佐をしていきたい。業務上の。それだけ。

そういうふうに取り繕つてないと生きていけねえんだ。すこしのことで傷つくし、自分でも泣きながら、なにが積み重なつて泣いてんのか、ほんとうに信じたくもないすこしのことなのだから。

大人も子供もないことも、知っている。

あるのはすべて、個々人の最先端にだれしもがいるということ。意識の確認できる対象、すなわちすべての生物に内在する自我。わからないものだから、敬意を表して扱うべきだとも思う。鳥も赤ん坊も、蜘蛛も犬も。

ちゃんと分かつて、それなのになんで。

分かってるからこそ傷つくのが怖い。馬鹿みたい。テレビ見てたって傷つくんだ。もう、なにも知らないほうがいいんだろうな。

思うに、ほんとうに、わたしは頭が弱いのだとおもう。

それでもこいつとやっていかなければならない。死ぬまで、付き合いっていくのはこの子とでしかない。

真意は愛していたりする？

（後書き）

こついつものを発露して、どういつぶうに他の人がおもつかで
その意見で自分は自分を見ようとしているのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4791y/>

摂食障害のわたしと向き合う

2011年11月17日18時37分発行